

Research Institute for World History

# Newsletter

No. 13

April 2008

C O N T E N T S

1. 鈴木久男 「消えていく世界史—中学校歴史教育の半世紀」
2. 君塚弘恭 「世界史研究所第5回懇話会参加記」
3. 鹿住大助 「第6回世界史キャラバンの報告」
4. 世界史研究所からのお知らせ

<http://www.npo-if.jp/riwh/>

発行：NPO-IF 世界史研究所

千葉大学文学部史学科西洋史研究室



npo-if

# 消えていく世界史 —中学校歴史教育の半世紀— 鈴木久男

## 1. ある試み

# 例

例えば下図のシルエットを中学生や高校生に示し「何に見えますか」と尋ねてみよう。シルエットを眺めながら、様々な答えが返ってくる。共通して多いのは「うつむいた若い女性」「岩の上にとまっている鷲(鳥)」という答え。少数派だが面白いのは「エイリアンの誕生」そして「なんとなく朝鮮半島」。・・・中学校、高校で社会科歴史的分野や世界史を教える4月、私の授業はこの種のシルエットを見せて始めることにしていた。与えられたシルエットを見て、自由に自分の考えたことを言い合う。そうしたことを通して、どこに視点を置くかによって一枚の図からでも様々な見方ができることをまず確認し、そして答えは多様であることをお互い理解し合って授業をやっていくと伝えていく。



しかし、私の本当の「ねらい」は実は別のところにある。それは我々がいかに思い込みや常識に縛られてしまっているか、という問題に関係している。思い込みや常識は比較するとか相手側から見るということを最初から無視し、「自分側の論理」ですべてを解決することを意味している。私がシルエットでねらったものは、いかに無前提に物事を解釈しているかということに気づき、そこから相対的に社会を見ることの意義を再認識させることに

あった。生徒はシルエットから様々なものを思いつくことができるが、すでにこの時点で常識の枠内でシルエットを眺めてしまっているのである。シルエットといえば常識的に黒い部分にだけ目を向けてしまいがちである。なかなか気づかないのだが、シルエットは周りの白い部分があるからこそ影の部分が意味を持っている。相対的に物事を見るヒントはこのあたりにあると思われる。社会は様々な関係で成り立っている。だからこそ、相対的に物事を見る視点を養って関係の枠組みを見抜いていくことが本来必要である。生徒がこれから学ぶ歴史の授業でそうした見方・考え方を広げていくための最初の支援として様々なシルエットを利用してきた。・・・前置きが随分と長くなったが、一体このシルエットは何だったのだろうか。・・・(残念ながら)このシルエットが海洋そして「大西洋」<sup>1</sup>であることに気づいた生徒はほんのわずかでした。しかし、その方が私としては生徒の驚きを目の当たりにして新たな意欲が湧いてくるのである。

## 2. 内向きの歴史理解

シルエットを使いなぜ相対的に物事を見ることの大切さを教えようとしたのか。この実践を意識して行い出したのは今から15年近く前になる。ちょうど国際化社会の進展に伴い、それにいかに対応していくかが国民の課題となり、様々な分野で具体的施策が講じられつつあった頃である<sup>2</sup>。そうした社会情勢だったが、それまで公立中学校で社会科歴史を教えてきた経験から、この教科がその誕生期以来、日本史と世界史からなる教科内容であることを歴史教育担当者が認識し、我が国の歴史を世界史の中で相対化していく視点を生徒が学んでいけば国際化に対応した教育が可能であると安易に考えていた。

ところが中学生を教えながら、生徒の「歴史」の捉え方にある変化が起こっていることに気が付いた。それは自分がいま学んでいるのは日本史であるという強い認識。そこからくる世界史は大体において自分たちとは関係のない「外つ国(とつくに)」の歴史であるという理解。そして自分の国は多くの点で一国的発展を遂げてきて

いるという解釈。その後、高校生に世界史を教えた時も、中学校時代は日本史を学んでいたと認識している人数は予想以上に多く、従って世界史は文字通り「別世界」史と解釈され、さらに世界史を同時代の日本史と関連づけて説明できる生徒は多くなかった。

国際化社会が進展し歴史的条件・価値観など様々に異なる他者と共存できるためには、生徒のこうした内向きの歴史の捉え方は等閑視できない問題状況と見て、相対的に物事を見るヒントの一つとして、シルエットを歴史学習の最初に与えていくことを思いついた。

しかし、中学校社会科歴史（世界史的内容）と高校地歴科「世界史」の置かれている状況を冷静に見つめ直すと、問題状況は予想以上に多岐にわたり進展していることがわかってきた。何が起こっていたのか、以下中学校歴史教育を中心に話を進めていくことにする。

### 3. 何が起こっていたのか～中学校社会科歴史的分野～

#### 1) 高校「世界史」の状況

ここ数年、世界史担当教師から世界史を学ぶ前の生徒の世界史の基礎知識が年々乏しくなっているという話を聞くことが多くなった。また（中学校で習っているから）高校生であれば知っているはずの世界史の内容が身につけていないという話も研究会等で話題にされる。あるいは高校3年生になって選択世界史を選ぶ生徒数の減少傾向も聞こえてくる。そして2006年10月末の「未履修」の発覚。どうも状況は芳しくない。ではその高校世界史の基礎力形成を担う中学校歴史教育はどうか。

#### 2) 中学校社会科歴史的分野～その独自性～

意外に理解されていないのだが、中学校歴史教育は日本史と世界史を総合的に学習できるような教科内容になっている。それは高校地歴科の教科構造が科目並列型をとり「世界史」と「日本史」が別個に履修されていることと明らかな違いを示している。この事実は軽く見られそうだが、前述した様にこの独自の教科内容を有効に利用すれば国際化する現代社会に対応する教育を展開できる可能性を持っているのである。

中学校社会科歴史的分野が日本史と世界史からなる教科内容を最初に示したのは、今日の中学校社会科の内容構成〔地理、歴史、政治経済（公民）〕の枠組みを作ったといえる1955年『中学校学習指導要領社会科』（以下『55要領』と略記、以降の学習指導要領もこの略記に準ずる）からであった。この『55要領』では社会科の目標を4つ

あげ、その目標2において「・・・日本の歴史ばかりでなく、世界的な内容も通して、日本史に関するものを主体としながらもそれとの関連において世界史の流れをとらえ、結果においては、その時代系列のあらましがつかめるようにする・・・」とし、日本史と世界史に関する内容を取り入れた歴史的分野の学習が新たに構想された。

さらに新たに登場した歴史的分野は、その具体目標2で「日本の歴史を世界史との関連や比較において考える態度を養い、日本の歴史の独特の発展の姿を理解させると同時に、広く世界各地の人類の歴史的活動の底には、共通な発展の姿や人間的感情や意欲があることを理解させ、今日の社会生活上の諸問題を、世界的な広い視野から理解していく態度を養う」という目標を掲げ、我が国の歴史を世界史との関連や比較において考え、さらに現代社会の諸問題を世界的な広い視野から理解していく態度を育成するという姿勢を打ち出した。ここにおいて、日本史と世界史を総合させた歴史的分野が1955年から中学校教育で始まったのである。そしてこの姿勢は歴史的分野の内容にも反映され、日本史を同時代の世界史と比較させながら理解させる指導を打ち出し、比較対象の時代、地域は特定なものに限定されず、広範な時代、地域を対象としていた。

1955年から始まった歴史教育は、従来の一国史的歴史理解を脱し、広く世界史的視野に立って日本の動きを世界の動きの中で捉えていくという新たな、しかも中学校教育独自の構想であった。さらにこの構想は、今日の国際化社会を生きるために必要な態度、すなわち一方向から世界を眺めるのではなく世界の中の自分という視点で人やものを見たり考えたりする態度の育成を先取りするかのような先見性を持っていた。

そしてこの『55要領』の目標の趣旨はその後の学習指導要領改訂においても概ね受け継がれ、歴史的分野の「独自性」は一見保たれているように思われてきた。ところが、歴史教育の場で教師も生徒も一番関わりの深い教科書を眺めていくと世界史の内容が年を経るごとに削減されている実態が浮かび上がってきたのである。

#### 3) 消えていく世界史

教科書で何が起こっているのか。次の表は1966年から2006年の40年間に発刊された教科書における世界史の内容の割合を示している。

**[表1] 教科書 [中学校社会科歴史的分野] における世界史の内容の割合**

	世界史の内容	全ページ数	割合
・1966年	A社 105p	309p	34%
・1977年	B社 97p	309p	31%
・1980年	C社 101p	305p	33%
・1981年	C社 92p	322p	29%
・1981年	D社 73p	285p	25%
・1993年	D社 89p	305p	29%
・1997年	C社 76p	300p	25%
・1997年	E社 68p	291p	23%
・2002年	C社 31p	195p	16%
・2006年	C社 37p	215p	17%

表1に見られるように教科書における世界史の内容の割合は1980年頃までは30%を超えていた。しかしその割合は漸次減少傾向を示し、この40年の間に半減してしまった。さらに現状はどうか、2007年度使用の歴史的分野の教科書は全部で8社から発刊されているが、世界史の内容の割合が一番高いのはF社の23%、最低がG社の13%、平均19%で状況は変わらない。1955年に構想された日本史を世界史との関連や比較において考える歴史教育は、時代の進行とともに世界史を削減し日本史を主体とする内容に変化してしまった。

しかし、自明のことだがこの40年間の日本社会はむしろ世界史を必要とする方向へ変化進展している。世界は相互依存関係を深め、国際問題は即国内問題となり場合によってはその逆も起こり得る時代となった。世界の在りようや歴史を、学び活かしていく必要の時代を迎えているのである。にもかかわらず削減は続いている。

さらに世界史の中で、時代や地域について教科書の記述量を検討していくと別の状況が明らかとなった。

表1に掲載した教科書において割合の減少は特に前近代世界に顕著で、次に示すように西ヨーロッパ世界は大幅に削減された。

**[表2] 4世紀~16世紀の西ヨーロッパ世界の記述量**

・1966年	A社 16p	・1993年	D社 8p
・1977年	B社 14p	・1997年	C社 9p
・1980年	C社 14p	・1997年	E社 8p
・1981年	C社 11p	・2002年	C社 2p
・1981年	D社 9p	・2006年	C社 2p

同様に前近代のイスラーム世界も元々記述量が少ないとはいえ2002年、2006年の教科書によっては消滅に近い状況になった。2007年度使用の8社の教科書でも前近代の西ヨーロッパ世界の記述量は平均3頁弱、イスラーム世界も平均1頁を若干上回る程の状況である。

以上の様に40年の間に中学校歴史教育において世界史は漸次削減され、特定の時代や地域が教えられないという事態が生じてきたのである。こうした状況は世界認識に偏った価値観をもたらす危険性を持ち、そしてそれは常識を形成する年代に達した中学生の世界像をよりステレオタイプ化していくのではないか。そして更に削減により高校「世界史」との間に圧倒的な情報量の差を生み出し、前述した様に「世界史」を学ぶ前の高校生の基礎知識の乏しさに関係してくる。世界史担当教師はこの状況に頭を悩ますが、生徒の立場から言えばそもそも関連知識を中学校歴史教育の中で獲得する機会が削減されてしまったのである。

具体的に教科書における情報量の差を中学校と高校の教科書で検討してみると驚くべき結果がでた。例えば前掲の表2に見られるように前近代の西ヨーロッパ世界の記述は中学校教科書では漸次減少しているのに対し、高校教科書はここ30年間記述量に著しい変化はなく、またイスラーム世界は年々増加傾向にある。もう一步踏み込んで、ほぼ同時期の中学校と高校の教科書における前近代の西ヨーロッパ世界の中から「西ヨーロッパ中世都市」を取り出し、それぞれの単元で使用されている用語数を比較してみたのが次の表3である<sup>3</sup>。

**[表3] 「西ヨーロッパ中世都市」用語数の比較**

○ 内用語数			
中学校教科書		高校教科書	
1966年 A社	(21)	1971年 a社	(27)
1980年 C社	(10)	1985年 b社	(53)
2002年 C社	(0)	2003年 b社	(50)

同様に他の単元においても1980年代になると用語数の差が明瞭になり2000年代には正常とは言えない差(=中学校の教科書記述ゼロ)まで拡大している。中学校の世界史的内容と高校「世界史」との間の不連続状態を思い知らされる。



#### 4. 世界史はどう扱われてきたのか

##### 1) 世界史は適当に大きくまとめて

中学校歴史教科書からの世界史の減少、この状況はなぜ生じてきたのか。ここからは教科書の目標や具体的内容や方法を示し、教科書の記述に直接影響を及ぼす学習指導要領の考察を通して原因の一端を明らかにしようと思う。

『55 要領』により、中学校社会科歴史はその目標において我が国の歴史をそれを取り巻く世界の歴史との関連や比較において考え、さらに現代社会の諸問題を世界史的な広い視野から理解していく態度を育成する、という姿勢を打ち出した。それは歴史的国際環境の中で日本史を捉えていく姿勢へと向かわせるためにも有効な教育的構想とも言えた。

しかし、その後数次の学習指導要領改訂を経る中でこの構想は大きく方向を変えていくこととなった。その転換は『58 要領』にまず見ることができる。『58 要領』の社会科の目標にも歴史的分野の目標にも「国民として自覚を高める」「国民的心情の育成を図る」とあるように、日本史を世界史の中で相対化することを通して理解させようとした先行『55 要領』とは逆に、日本や日本人を強く押し出して、日本を基軸に世界を理解させようとする姿勢が明らかにされた。そして指導上の留意事項において、日本史を世界史的視野に立って学習させることの大切さを唱えながら、「日本に特に関係の深いことがら以外は、適当に大きくまとめて学習させることが望ましい。また、世界史の中では、特に近代世界の成立とその発展に重点をおき、日本の近代化を考察する上に役立たせるように配慮することが重要である。」とし、前近代の軽視が明確になり、代わって日本の近代化理解のために世界史的内容は近代史を重視する方向が強まった。

『58 要領』を転機にその後の中学校社会科歴史における世界史の位置付けは徐々に背後に追いやられ、『69 要領』では日本に特に関係の深いことがら以外とされた時代や地域は大きくまとめられ、その結果日本史と世界史を同時代史的に理解する機会が狭められてしまった。具体的には従来は、隋・唐の時代とイスラーム成立期そして聖徳太子・律令制度の時代が教科書において同一単元で扱われていたが、イスラーム世界はヨーロッパ世界とともに前近代史として大きく括られ、日本史との同時代史的把握が困難になり、日本史の視野に入ってくる世界史は背景に押しやられてしまった。

##### 2) 世界史軽視の方向へ

続く『77 要領』『89 要領』で世界史は「ゆとりある学校生活」というねらいの下での授業時間の削減<sup>4</sup>の影響を直接的に受け、日本史と関係が深くないとされた前近代の世界史的内容はさらに削られ、相対的に日本史の割合が増加した。前掲表 1 にあるように 1981 年以降、教科書の世界史の割合が 20% 台に落ち込んだのである。

そして『98 要領』で歴史的分野の内容からイスラーム世界は完全に姿を消し、ヨーロッパ世界もヨーロッパ人の日本来航について理解させ、その文化の伝来が我が国の社会に及ぼした影響について考えさせるにとどまりヨーロッパ中世の歴史は扱われなくなった。その結果教科書の世界史の割合は 2002 年以降 10% 台となり、教科書によっては近代以前のイスラーム世界とヨーロッパ中世世界は記述がなくなり、前近代のヨーロッパ世界はたった 2 頁の中に閉じこめられてしまった。

#### 5. 世界史を取り戻そう

歴史教育において中学校社会科歴史的分野の相対的独自性を問われれば、日本史と世界史を総合的に学習できる教科内容にそれがあると言えよう。それは『55 要領』の目標にある、日本史を世界史との関連や比較において考え、さらに現代社会の諸問題を世界史的な広い視野から理解していく態度を育成する、という文言からも読みとることができる。そしてこの目標は、自国史中心の歴史理解を脱し、広く世界史的視野に立って日本の動きを捉えていくという新たな、しかも中学校教育独自の歴史教育の構想であった。

しかし、その後数次の学習指導要領改訂を経るなかで、この構想は大きく方向を変えていくこととなった。それは「世界史的視野に立って」「世界の歴史を背景に」日本史を理解させる、あるいは「日本と諸外国の歴史や文化が相互に深く関わっていることを考えさせる」という方針を示しながら、他方では日本史に直接関わりのある、あるいは日本史の視野に入ってくる世界史関連事象だけを取り上げ日本史を理解させるという矛盾した方針を打ち出してきた。

はたして国際化が進展する社会において、前近代あるいは日本史と直接関係のない世界の動きを教えずともよいとする論理や、その結果世界史的内容が削減された歴史教育の場から、歴史的条件や価値観など様々に異なる他者との共存ができる生徒の育成は可能なのだろうか。

改めて中学校社会科歴史的分野が持つ相対的独自性を

歴史教育担当者は認識し、世界史的視野に立って日本史を同時代史として世界と比較、関連させていく歴史教育を構想、実践していくことが必要ではないか。世界史は日本とは「別世界」史という意識が生徒の中に芽生え、あるいは自分達の基準で他の文化ないし世界を判断していく見方が広がっているのは、歴史教育から無批判に削減されあるいは大きく括られ、そして消滅させられた「時代や地域」が増えてきたことと無関係ではない。

昨今の歴史研究は、密度の違いこそあれ遠い過去から人類は異なる地域間で接触交流し、新たな文化変容を遂げてきたことを、我々に明らかにしてくれる。前近代の歴史を歴史の実態を無視し簡単に「日本と特に関係のあることがら以外の時代や地域」として削り取ってしまっているのか。そうではなく国際化がより一層進展している時代に生きる生徒に「・・・東アジアとインド洋と地中海の海域世界は、それぞれ、宗教的にも、民族的にも、文化的にも、産業や特産物においても異なっているが、異なっているからこそ、相互につながるのである」<sup>5</sup>という新たな関係性の捉え方を教材として準備すべきだろう。そして歴史教育担当者は「文化的地域の内的な発展の歴史だけでなく、文化的地域間のあるいは地域を超えての相互関係にも注意を払うべきである。文化や文明が自己完結的であることはまれにしかないのである」<sup>6</sup>という言葉を実感に受け止めて、歴史教室に向かうべきではないだろうか。

(すずき ひさお 千曲市立屋代中学校教頭)

[註]

- 1 擬円筒図法の地図の大西洋をシルエットに加工。
- 2 例えば1989年度版中学校学習指導要領の改訂の基本方針の一つとして「国際理解の推進」があげられている。
- 3 詳細は鈴木久男『世界史を取り戻そう』（ニーズ対応型地域研究推進事業 アジアのなかの中東：経済と法を中心に）プロジェクト事務局（一橋大学）編 Booklet Series No.1、2007年参照。
- 4 社会科歴史的分野の年間授業時間は1950年代～1980年代初めにかけては175時間が標準とされていたが、『77要領』施行の1981年からは140時間、そして現行では105時間（週当たり3時間）という状況である。
- 5 小林道憲『文明の交流史観』ミネルヴァ書房、2006年、163p.
- 6 Marilyn Hitchens, "World History as a Course of Study", in Heidi Roupp, ed., *Teaching World History* (New York: M.E.Sharpe, 1997), p. 11.

# 世界史研究所第5回懇話会参加記

君塚弘恭

2007年12月19日(水)、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階会議室にて、第5回世界史懇話会が開催された。報告者は、カリフォルニア大学(アーバイン校)教授のSteven Topik氏であり、「コーヒーからみたグローバル・ヒストリーと地域間のつながり：コーヒーの世界市場の創出」(A Caffeinated Perspective of Cross-regional Chains in Global History: The Creation of the World Coffee Market)に関する報告とその内容をめぐる討論が行われた。報告者のトピック氏は、19世紀にブラジルで生産され輸出されたコーヒーとそれに関わる諸産業、諸問題について専門としている。本報告で、トピック氏は、コーヒー貿易が活発化する16世紀以前から21世紀の今日に至るまでの長期的時間軸の中で、コーヒー取引に関わる人々や組織、生産および消費地域の変化について分析し、世界経済の中でコーヒーがどのような役割を果たしたかをダイナミックに論じられた。以下に報告の内容を要約する。

まず、トピック氏は、報告における二つの重要な問題を提起した。第1に、特定の商品が持つ世界的つながりを分析することであり、第2に、そのつながりを歴史化する意義についてである。私たちは、様々な商品(goods)の中でも、世界で「普遍的価値を持たされた商品=コモディティ(commodity)」を見つけることができる。商品が普遍的価値を持つためには、様々な地域の人々によって消費され、彼らの文化の中に浸透する必要がある。したがって、コモディティは、形成過程において、文化や階層の違う人々を結びつける。グローバルな歴史研究において、このような「コモディティ・チェーン」の分析が有効ではないかという。また、トピック氏は、コモディティについて、はじめから普遍的な価値を持ったもののみならず、歴史的に形成されたものとして考えようと提案する。つまり、コモディティ・チェーンそのものも歴史化されるのである。コーヒーは、その歴史の長さ、生産や消費の地理的広がり、生産と流通に関わる人や組織の数から見て、適した事例になるという。

現代世界で最も流通しているコーヒー品種の一つであるアラビカ種は、エチオピアに起源を持つが、16世紀

以前は生産物や飲み物ではなく、現地部族の儀礼的食物だった。しかし、16世紀にイエメンでコーヒー豆の焙煎技術が確立され、遠隔地貿易商品として長旅に耐えうるものとなると、コーヒーの消費はスーフイズムの拡大に対応して広まった。次世紀には、アラビカコーヒーは、イエメンの生産地から主にモカへと地元商人によって集積され、アラブ商人やインド商人によってインドネシアから北アフリカ、バルカン半島まで輸出された。しかし、コーヒーの生産地はイエメンとエチオピアのみであり、それが変化するのは18世紀のヨーロッパ商人の力による。オランダ、イギリス、フランスの商人たちは、18世紀を通じてコーヒーを買い付けるだけでなく、それぞれの持つ植民地へ生産技術を移植した。その結果、コーヒー生産地域は大きく拡大され、例えば1721年にコーヒーの9割をモカから輸入していたアムステルダムは、その5年後にはインドネシアのジャワから買い付けるようになった。このようなヨーロッパ商人たちの活動により、18世紀末までにコーヒーの生産・消費地域間ネットワークは大きく拡大された。こうして、コーヒーは「コモディティ・チェーン」を形成した。

このようにコーヒー生産地域は拡大したが、18世紀の生産量は決して多くなく、コーヒーは上流階級のための奢侈品だった。しかし19世紀、世界におけるコーヒー生産量が増大すると一変してコーヒーは大衆飲料となった。新しいコーヒー生産の中心はブラジルである。ブラジル人たちは、コーヒー生産・輸送技術を向上させ、独自に市場や金融機関を開拓した。技術革新は生産面より輸送面で顕著であり、例えば鉄道は、安価な運賃で労働者や商品を運ぶことを可能にし、ブラジルの生産地と貿易港とを結びつけた。ヨーロッパ諸国によるアジア・アフリカにおける植民地拡大と船舶輸送技術の向上、アフリカからの安価な労働力は、ブラジルコーヒーの普及に貢献した。1906年には世界のコーヒーの約8割をブラジルが生産した。技術向上により運賃問題が解決し、電信が導入されると、ヨーロッパやアメリカの輸送業者たちは市場支配権を失い、かわって焙煎技術とブレンド技術を持つ人々がコーヒー市場に影響力を及ぼすようになった。



た。消費者はブレンドされたコーヒーを飲むのだから、ブレンド業者は彼らにとって生産者であった。電信は消費者のニーズと生産者とを結びつけることを容易にし、焙煎やブレンドの傾向もより複雑になった。こうして19世紀・20世紀におけるコーヒー市場の拡大と情報伝達技術の発展は、コーヒーが持つ「コモディティ・チェーン」を広い範囲で結びつけ、より複雑なものにしていった。

最後に、1989年以降、すなわち多国籍企業が大規模に展開する時代が対象となる。ここでは、主にコーヒー生産・消費地域と販売業者の変化が述べられる。まず、前者についていえば、アジア諸国の台頭であり、消費国としては日本、生産国ではヴェトナムやフィリピンがあげられる。今日、日本は、世界のコーヒーの約8%を消費する。また、ヴェトナムにおけるロブスタ種の生産は、コーヒーの生産地域の変化をもたらすのみでなく、より安価なコーヒー供給を実現した。ロブスタ種の使用は消費の変化と関係し、例えば日本では喫茶店で用いるアラビカ種ブレンドと缶コーヒー用のロブスタ種ブレンドのように使い分けられた。次に、スーパーマーケットとインスタントコーヒーの普及により、家庭で消費されるコーヒーが増え、ネスレやコカ・コーラなど食品大企業がコーヒー産業に参入した。これらの企業は家庭用コーヒー市場を独占していった。

以上のように、コモディティ・チェーンを歴史的に分析することは、地域間ネットワーク、生産から消費の過程に動員される要素の変容を確認することになる。したがってそれは、グローバル・ヒストリーに必要な視座を提供し、ヨーロッパ中心主義を超える可能性をさぐることになると結論づけられる。

報告者と参加者との討論は次のようにまとめられるだろう。第1は、ヨーロッパ諸地域におけるコーヒー貿易の重要性についてである。ボルドーから見た場合、コーヒー貿易の重要性はどうであったのかというトピック氏の私への問いかけから議論が始められた。私は、18世紀後半にアンティル諸島貿易がボルドーの主要部門となり、カカオや砂糖同様にコーヒーもボルドーに輸入され、その後アムステルダムやハンブルクに再輸出されたと答えた。これに対しトピック氏は、ボルドーの基軸商品は葡萄酒ではなかったかと問われた。私は、葡萄酒は常にボルドーの基軸商品であり続けたものの、こと18世紀後半に関していえば、植民地産品の再輸出がボルドーの港湾活動を飛躍的に成長させたことを強調した。

第2は、コーヒーをめぐる「好み」や消費文化の問題である。世界史研究所長の南塚信吾氏は、イタリアから

フランスへの絹織物産業の伝播について引き合いに出しつつ、技術の伝播や商品の品質の問題について質問された。トピック氏は、コーヒーにもテイスティング審査や格付けが存在し、さながらフランスワインのようなランク付けが行われていることについて紹介された。私は、この議論に関連させて、品質やトレンドを問題にする場合、消費地域における「好み」について考慮する必要性を強調した。トピック氏は、これに対し、消費地域における「好み」の違いは重要な論点となるだろうと述べた。

また、南塚氏は、日本で消費拡大とコーヒーの消費形態、例えば缶コーヒーの普及について質問された。トピック氏は、これも重要な論点であり、報告内ではスターバックスなど新たな喫茶店文化についてふれたが、日本においては缶コーヒーと自動販売機の普及もまたコーヒー消費拡大に重要な役割を持っただろうと答えられた。聞きそびれたことだが、私の関心からいえば、コーヒーの普及にともなう生活用品の変化は興味深い研究対象となろう。例えば、18世紀初頭のフランスの事例をとると、ボルドー貴族によって作成された遺産目録37件のうち15%にコーヒーポットを確認できる。

第3に、コーヒー生産に関する問題である。これについて千葉大学の橋川健竜氏が次のような質問をした。コーヒーは土地をやせ細らせる作物で、土壌の悪化が19世紀のブラジル奴隷制の廃止を後押ししたとする研究もあるが、本報告では、近年世界の多くの土地でコーヒーを経済的向上のための道具として栽培しはじめる地域が多いという。化学肥料の利用によりコーヒーと土壌の問題は解決され、特定の土地で永続的に栽培可能になったのか。これに対しトピック氏は次のように回答した。コーヒーは「フロンティア的作物」で、土壌が悪化すると、未開発の土壌肥沃な場所へと栽培が移動する。化学肥料をもってしてもこの問題は解決できていないし、化学肥料は高額にもなりうる。この点をとりあえず脇において世界各地でコーヒーは生産されているといえる。

討論の最後にトピック氏は、参加者に対し「コーヒーの他に世界史研究を可能にする商品はなんだろうか」と問われた。参加者からは、砂糖やタバコ、ワインなどがあげられた。いずれの商品もヨーロッパ商人によって媒介されて広まったといえる。しかし、トピック氏の報告からも見られるように、その役割はたぶんに限定的である。コモディティ・チェーンに関わる様々な人々を描き出すこの巨視的な手法は、それぞれの役割を深く考察することで、グローバル・ヒストリーの発展に貢献するだろう。



# 第6回世界史キャラバンの報告

鹿住大助

2007年11月10日(土)、埼玉県本庄市の同市立図書館第2会議室をかりて、第6回世界史キャラバンが開催された。今回の統一テーマは「1880年代の世界、日本、そして本庄：自由民権運動、帝国主義への動き、郷土と国家、そして世界」であり、1880年代の世界史を5名の報告者、および30名以上の参加者と共に語り合うことができた。

1880年代は、日本においては1889年の大日本帝国憲法制定と議会の開催に向けた動きが活発になった時期であり、今回のキャラバンの開催地となった本庄市をはじめ、埼玉県北部地域においても自由民権運動が隆盛を迎えた時期である。このように近代国家としての体裁が整えられていくと同時に、日本は中国、当時の清朝と争いながら朝鮮への派兵を繰り返し、東アジアへの帝国主義的侵略の姿勢を強めていった。帝国主義は当時の日本だけの問題としてでなく、英・仏をはじめ、列強による世界の覇権をめぐる争いという、世界史の構図の中で考えなければならない。このようにしてみれば、本庄市の歴史というのも世界史とのつながりの中でとらえ直すことが可能である。現在の世界は、日本を含め、新自由主義的展開を遂げた諸国と、世界の各地域への帝国主義的干渉を強めるアメリカという構図で把握される。本庄市近郊も含め、1880年代当時の世界諸地域の政治や経済、文化がどのように連動していたのかを考えることは、我々が現在生きる世界を考える上でも、示唆的な世界像を与えてくれるであろう。以上のような趣旨のもと、5名の報告者によって、テーマ別の発表がなされた。

はじめに、世界史研究所所長の南塚信吾氏より「自由民権運動の時代と世界：生糸の繋ぐ世界」についての報告がなされた。南塚氏の報告は、1884年に本庄市近郊で起こった群馬事件、秩父事件をはじめとする自由民権の気運の高まりを、「絹の世界」との関連からとらえ直そうとするものであった。氏は歴史における「短期波動」として、1880年代にはヨーロッパ、中国を中心とする二つの「渦巻き」があったことを指摘する。同時に、「中期波動」としての「絹の世界」においては、明治期以降の日本の近代化を支えた養蚕・生糸生産に群馬・埼玉地域が関わ

り、19世紀後半にはこの地で生産された絹が世界市場と結びついていった。「短期波動」のレベルでは1890年代に向けてヨーロッパとアジアの「渦巻き」の接合がみられ、「中期波動」では政治の世界とは別のつながりが生み出されていた。南塚氏は、本庄は短期の政治的動向に閉ざされた地域ではなく「絹の世界」とつながっており、それがこの地域の「智」をも活気づけていたと結んだ。

次に、世界史研究所研究員の木村真氏が「郷土、国家、世界：バルカンの1880年代」と題した報告を行った。木村真氏は、本キャラバンの会場となった図書館にあわせて、バルカン南部の読書室の役割の変化を中心に話を進めた。19世紀のバルカン南部、現在のブルガリアやギリシア、マケドニアなどの地域では、村落や都市の人々が集い、新聞などを読む公共の施設としての読書室が普及していった。読書室は出版物を収集し、人々に読んで聞かせたり、演劇が行われるなど文化施設としての性格をもっていた。こうした国家をもたない人々による読書室は、1880年代のナショナリズムの高まりや国家建設にもなってその性格を変化させ、民族ごとに読書室や学校が設置され、民族の言語が教えられるようになる。人々の自治を求める動きとあわせて、「何人であるか」という民族的アイデンティティを教える場としての役割もあわせもつようになっていったのである。

三人目の報告者である千葉大学教授の趙景達氏は「1880年代の日本と朝鮮」を表題に掲げた。1880年代は、朝鮮を中国を中心とする秩序から西歐的秩序の中にかかにして移行させ、いかにして近代国家を建設するかをめぐって、朝鮮人だけでなく、西歐列強や日本が思惑をめぐらせた時代であった。同時代日本の自由民権運動もまた、朝鮮をめぐる動向と無関係ではなかった。1880年代当初の自由民権運動においては、対欧米という視点からアジア連帯論が模索され、福沢諭吉も文明開化を果たした朝鮮・中国とともに日本が盟主となって欧米に対抗するという図式を構想した。ところが、甲申政変などの政治的事件、自由民権運動の凋落を受けて、日本の世論は排外主義へと転じ、清国の影響下から抜け出せない「朝鮮を懲罰すべし」となる。日本にとっての朝鮮は、「中華

を中国から奪取する近代化の過程の中に位置づけられた。当時の「大アジア主義」や最近の「東アジア共同体論」も含め、「アジア」は常に日本の視点で語られるのである。

四人目の報告者、世界史研究所の木村英明氏からは「鹿鳴館の時代：武化から文化へ」というタイトルで報告があった。1880年代の日本は、70年代後半の西南戦争や伊勢暴動の武力による鎮圧を経て、80年代末の憲法発布・議会開設へ向けた近代国家の体裁を整える準備に入った時代であった。1880年に建設がはじまり、83年に竣工した鹿鳴館は、武力による日本の統一から、「文」という道具を動員した国家建設へと向かう日本の象徴であった。この過程においては、文学などの表現言語「改良」による国民国家の言葉の創出が目指されたほか、体操・音楽などの身体表現においても国民的統一が図られた。鹿鳴館に代表される西洋文物の折衷的吸収と国民国家単位での「文」化は、後の時代の排他主義的ナショナリズムへとつながった。木村英明氏は、いまだモダンに代わるものを見いだせない我々にとって、「鹿鳴館的なもの」の再検討が世界史における日本の位置を探る契機となることを指摘して報告を終えた。

最後に、本庄市在住の山口晃氏は、同じく本庄出身のアナキストである石川三四郎を題材に、「原風景としての帆掛け舟：1880年代と石川三四郎」という報告をおこなった。1876年埼玉県児玉郡山王堂村（現在の埼玉県本庄市山王堂）の船着き問屋に生まれた石川は、子供時代を利根川の水流を中心とした世界で過ごした後に、アナキストとしての活動に入り、投獄、亡命、海外渡航、疎開な

ど「無宿」の生活を続ける。このように「無宿」者としてみなされる石川も、利根川を運行する帆船を原風景とした郷土を語っている。彼の中には「郷土への愛着」と「旅」「さすらい」という二面性がみられ、それが小規模集落の自律・自治を中心とする単位と、それを可能ならしめるより大きな秩序という石川の思想にも反映されるのである。利根川を原風景とする世界は、石川にとっての郷土であると同時に、人為的な陸の単位に閉じ込められることなく、越境を促すものでもある。この郷土と越境が、人間としての石川三四郎を通じて体现されていたのである。山口氏の報告は、先の四報告によって示された80年代の日本と世界の流れを、石川三四郎という本庄（利根川）を郷土とする個人の中に注ぎ込ませ、同時に郷土からの越境、「外へ」の志向を示すことで、本キャラバンの最後を締める優れた内容であった。

以上、五つの報告の後に、参加者と報告者の中で質疑応答があった。本庄の養蚕業に関するコメントや、日本の文化と権力の問題、「アジア主義」に関する質問など活発な意見交換がなされた。その詳細は省くが、過去のキャラバンに比べても充実した内容であった。キャラバンの準備・運営にご尽力下さった本庄市立図書館館長の吉田敬一氏に深く感謝申し上げたい。キャラバン終了後、報告者・参加者は夜の本庄を「さすらった」。そこでも一層充実したコミュニケーションがなされたことを述べて、本報告の終わりにかえたい。

---

## 世界史研究所からのお知らせ

---

### 訃報

.....

世界史研究所顧問を務めて下さっていた西川正雄氏（東京大学名誉教授）が1月28日に永眠されました。氏の数々の研究論文に表された明晰な思想、およびこれまでの世界史研究所へのご助言にたいし、研究所員一同、敬意と謝意を表するとともに、心より哀悼の意を表します。

### パトリック・マニング編 『世界史のグローバルな実践 — 世界への提言—』 原題 [Patrick Manning (ed.), *Global Practice in World History: Advances Worldwide* (Markus Wiener Publishers: Princeton, 2008).]

.....

ピッツバーグ大学教授のパトリック・マニング氏が編集した『世界史のグローバルな実践』が出版されました。この本では、2006年にボストンで開催されたシンポジウム「世界史の研究 — 接続とグローバリゼーション—」(Research in World History: Connections and Globalizations)での議論や世界各国での世界史への取り組みが紹介されています。

日本からは、大阪大学の秋田茂氏が「アジア的視座からのグローバル・ヒストリーの構築」("Creating Global History from Asian Perspectives")という論文を執筆しています。この論文では、近年大阪大学が中心となって行っている世界史研究や教育への取り組みが紹介されています。

また世界史研究所の南塚信吾氏は、「日本における世界史研究所の意義」("The Significance of the Research Institute for World History (NPO-IF) in Japan")という論文を上梓しています。この論文では、明治期以降の世界史叙述を足がかりに、日本における世界史研究の必要性や可能性が論じられています。また学術的な側面だけでなく、当研究所が行っている世界史キャラバンなどの普及活動への取り組みもあわせて紹介されています。

---

## NPO-IF 世界史研究所

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-17-3 渋谷アイビズビル 10F TEL: 03-3400-1216 FAX: 03-3400-1217  
E-mail: world\_history@npo-if.jp URL: <http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/>

---